

まえがき

本書は、アジア経済研究所が2013年度から2014年度にかけて2年間実施した「アフリカの障害者—障害と開発の視点から」研究会の成果である。同研究会は、平成17年度からアジア経済研究所で始まった「障害と開発」に関する一連の研究プロジェクトにおいて、はじめてアフリカ大陸を対象とするものである。この一連の研究プロジェクトの最初の成果である森壮也編『障害と開発—途上国の障害当事者と社会』（研究双書 No. 567）で、「障害と開発」という開発問題として障害問題をみる視点が提示された。本書もそこで述べられた基本的な方法論を基としている。

「障害と開発」では、これまで開発研究や地域研究と障害学の知見や方法論の間での学際的な研究で成果を挙げてきた。障害学は、英米などで発達し、日本にも持ち込まれた障害を障害者個人の問題ではなく、社会の枠組のなかにみる障害当事者の視点（障害の社会モデル）に立った研究方法論である。東南アジアや南アジアをフィールドとしたこれまでの研究（森 2008; 2010）などでは、従来のような政府の福祉政策の枠組を追う研究や社会福祉の領域で発展してきたケース・スタディを中心にした研究でできなかったもの、みえにくかったものを見出すことを成果として挙げてきた。

本書でも、同様にアフリカの地域研究と障害学との間での橋渡しをするというアプローチが採用された。日本におけるアフリカを舞台とした「障害と開発」分野の研究では、いくつかの特定国を対象にした研究はあるが、東、西、南といった広域にわたって、それぞれの地域での特徴もあぶり出し得ている研究は、まだない。本書でも取り上げられた国は少ないが、地域的な広がりという意味では、ほかにはない研究書を編むことができた。各地域に深くコミットしている研究者が、文化人類学、法学、言語学、開発学といったさまざまなディシプリンを背景として、それぞれ担当国、担当地域の「障害と開発」の現在に取り組んだ。

アジアとはまた異なるアフリカの「障害と開発」の現状と課題をあぶり出

して欲しいという編者からの問題提起に対し、各国それぞれの多様性とアフリカ全体としてアジアとは異なる様相が少しみえてきたのではないかと思う。

本研究のこうした成果は、各国の障害者の実情についての理解の進展だけでなく、政府の障害者政策とのギャップも浮き彫りになった。また地域的な取り組みである「アフリカ障害者の10年」が一度の失敗のあとで、再スタートしているが、その将来も依然として不安な状況にあることも明らかになった。これらのファインディングは、日本政府も積極的に取り組んでいるTICAD（アフリカ開発会議）などの国際協力の枠組みにおける障害包摂的な支援のあり方のビジョンの土台を提供することにつながるだろう。

また各国の現在の障害者関連法制の成立過程と障害当事者団体の関係からは、障害当事者の立場にたった法制という政策の基本的枠組ができていのかどうかを検証された。アフリカでは一部の国で、憲法に障害者の権利についての規定や障害当事者の政策決定過程への参加についての規定がみられるが、それが憲法の規定だけでなく、実際にどのように実現されているのかも本研究会の成果を通じて明らかになった。HIV/エイズ政策では成果を挙げている、障害者問題については、まだほとんど無策に近い状況にあるエチオピアのような国もある一方で、障害者の諸政策へのインクルージョンに大きな進展を見せている南アのような国、そしてその中間に位置するケニアやセネガルのような国々。さらにまた政府の障害者政策がほとんど皆無に近いなかで、障害当事者たちが自活の道を探ったコンゴ川での交易の事例など多くの興味深い事例が本書では示されている。

各国の貧困削減や開発政策における課題を明らかにすることで、我が国のアフリカ支援で障害包摂的な支援がどのように実現できるのかという政策提言を出していくことが可能となる。これはTICADにおける日本の支援策を、だれも排除しないような、よりよいものにしていくことにもつながる。また日本のみでなく、国際的な支援についても、日本からの提言としてどのようなコーディネーションが今後必要なのか、各国毎の対応のあり方や支援分野についての具体的な特化などの提言が可能となる。そして国際社会の開発目

標として大きな成果を挙げたミレニアム開発目標（MDGs）のあとを受け、2015年からスタートした持続的な開発目標（SDGs）においては、アフリカへのコミットメントを最貧国への対策として念頭におくなら、障害についてもどのようにアプローチして行かないといけないのかに、本書の終章で示される課題がヒントを与えることになろう。

なお2年間にわたる本研究会では、本書の執筆を担当した委員の他、南アフリカで日本の障害当事者によるJICAスキームを利用した国際協力を行っているヒューマンケア協会の降幡博亮氏において、南部アフリカ地域での重度障害者の自立生活支援についてご報告を頂いた。龍谷大学の落合雄彦教授からは、本研究会では深く掘り下げることが難しかったアフリカの精神障害者についてのご報告を伺った。さらに立命館大学の立岩真也教授には、日本の障害学研究について概観をお話頂いた。最後に2014年度地域研究コンソーシアム（JCAS）次世代ワークショップの場をお借りして、京都大学地域研究資料センター（当時）の姜明江先生には、ザンビアのハンセン病者についての障害と開発の視点からの研究という新たな視点も提供頂いた。研究会では、オブザーバーとして研究所内から、武内進一、山形辰史、津田みわ、児玉由佳のアフリカ地域をよく知る研究員において頂き、それぞれ専門の立場から有益なコメントを頂くことが出来た。研究会の各回では、ろう当事者でもある編者と各委員との効率的かつ深いコミュニケーションをはかるため、手話通訳の方々にもご活躍頂いた。このほかにも本研究会の主たる成果は、国際開発学会第16回春季大会でも報告され、同学会の分科会のコメンテーターとして、神戸大学の高橋基樹教授、JICA（当時）の土橋喜人氏からも刺激的かつ貴重なコメントを頂き、次のステップについての課題も頂いた。これらの多くの貴重な議論と支援のおかげで本書はなった。ここに記して改めて感謝の意を表したい。

最後に、研究所の内外の匿名の査読者の方々からも的確な数多くのコメントを頂き、最終原稿に向けたとりまとめでは、大いに役立てさせて頂いた。現地調査で協力下さった現地の障害当事者、政府および関係団体の皆さんに

も貴重なインタビューの機会を頂いた。改めて感謝するとともに本書がアフリカの発展、とくに障害インクルーシブなアフリカの発展に日本および世界が貢献するための土台となることを願ってやまない。

2015年11月5日

編者

〔参考文献〕

- 森壯也編 2008 『障害と開発—途上国の障害当事者と社会—』 (アジア経済研究所研究双書 No. 567) 日本貿易振興機構アジア経済研究所.
- 2010 『南アジアの障害当事者と障害者政策—障害と開発の視点から—』 (アジア経済研究所アジ研選書 No. 27) 日本貿易振興機構アジア経済研究所.